学生部門

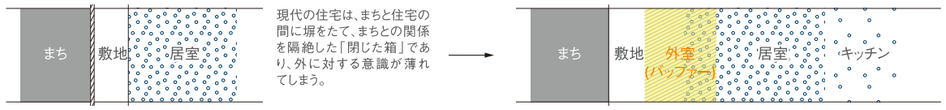
優秀賞

堀田 翔平・牛島 美夏

信州大学　熊本大学

【作品名】一家段欒 -家族の気配とまちの余韻を纏う家-

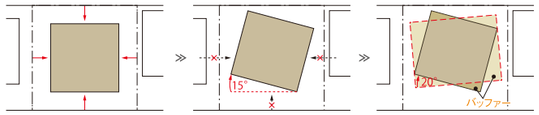
コンセプトダイアグラム



現代の住宅は、まちと住宅の間に塀をたて、まちとの関係を隔絶した「閉じた箱」であり、外に対する意識が薄れてしまう。

まちと居室の間にsemi-privateな「バッファー空間（=外室）」を挿入し、まちからの余韻を居室に引き込む。この余韻（= 音・匂い・天気・光・風）が日常に非日常を与え、団らんのきっかけをつくる。

ダイアグラム❶　角度を振ってまちの余韻を引き込む



敷地境界から均等にセットバックし、周辺環境を引き込む余地を外周に設ける。

前面道路や隣家に対して15度振ることで直接的な視線を避け、まちと住宅との関係を曖昧にする。

2階部分を1階に対して20度（敷地に対して5度）振ることで、内外さまざまなバッファーをつくる。

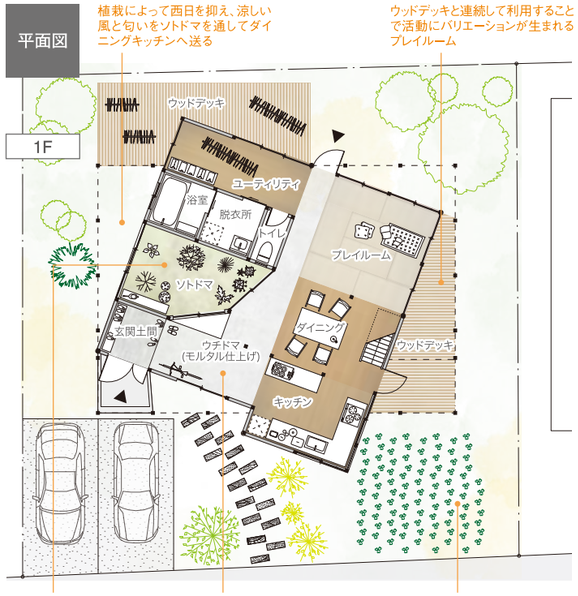
ダイアグラム❷　家族の気配を感じられる中心性と分節

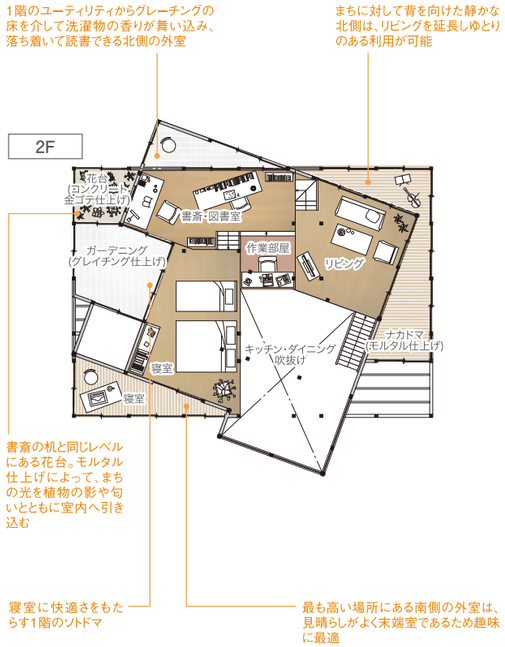
1階にキッチンやプレイルームなどのsemi-public機能を配置し、2階にプライバシーの高い機能を配置。

キッチンを中心に、2階部分を段々のらせんを描くように配置させ、キッチンの中心性を高める。

1階をワンルーム、2階は床を分節して隣の室同士を接続。家族の気配を感じることができる。

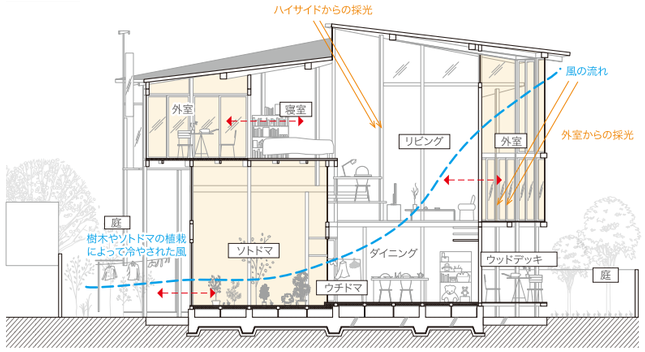
平面図





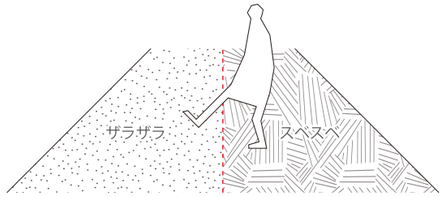
断面図

ダイニングキッチンを囲むように居室、外室をすべての方位に設けまちの様子を住宅内に映し込み、家族の団らんを生み出す。室内環境はハイサイドライトや温度差を利用した自然換気などを利用。細かく分節された屋根は周囲の環境との調和を図る。



マテリアルによる室の分節と仕上げテクスチャ

機能の異なるテクスチャの床仕上げ材を張り、住宅内部をマテリアルの変化によって分節。1階は「モルタル金ゴテ押さえ」仕上げのウチドマが東西をやわらかく分節し、2階は各外室にさまざまなマテリアルを用いることで、光や匂い、音といった外部環境を内部に引き込む。異なるマテリアルを跨いで家具を配置し、住まい手に自由な使い方を与える。



1階のウチドマとダイニングの自由な使い方

2階のリビングと外室の自由な使い方

設計コンセプト

かつて、建具を開けるとまちを行き交う人々の声が家中に響き渡ったのに対し、現代の住宅は、気密性やプライバシーを重視しすぎた結果、まちから隔絶されています。そのような排他的な“余韻”が入り込む余地のない住環境では、日常にまちから伝わる微々たる変化を感じられません。

『あ! いま金木犀の香りがしたね』
『今日、隣まちのお祭りの太鼓の音色が聞こえたよ!』

こんな些細な変化を体験できる家であれば、家族の団欒が自然と生まれるのではないでしょうか。この提案は、住宅とまちの間にバッファーとなる外室を介入させることで両者を緩やかに繋ぎ、『日常に微々たる非日常』をまちから“余韻”として引き込む住宅の提案です。引き込んだ“余韻”はバッファーを介して居室に伝わります。さらにスラブを細かく分節して壁をなくし、段々の螺旋状に配置した居室から“まちの余韻”と“家族の気配”が家の中心に伝わり、趣味や家事といった個性楽しみながらも家族の顔がうかがえます。

ささやかな空間の仕掛けが『日常に微々たる非日常』を与え、『一家段欒』が日常的に起こり、家族の新たな住まいを築いていきます。

審査委員講評

敷地に対して平行ではなく少し角度を振ることで周辺との隙間に生まれる余韻を引き込もうとする案。1層と2層とでさらに微妙に角度を振ることで生まれる内部空間のズレに対して素材による空間の変化に意識できている点が実に興味深いと思いました。また平面パースによって螺旋的に変化していく内部空間を立体的に見せる表現が印象的でした。